郷土資料

昭和四十九年七月二十八日

第六十四回史跡めぐり資料（春日部市）

越谷市郷土研究会

案内

一、日時　七月二十八日（日）
　　越谷駅構内集合　午前十時出発

一、場所　春日部市

一、コース　越谷駅――春日部駅――小淵観音――不二山――
　　最勝院と春日部重行公墳――春日部駅――越谷駅

一、会費　二百円　電車代他
　　昼食持参の事

①春日部氏は本姓は、紀氏である。天皇より出て遠く紀貫之（古今和歌集の撰者、土佐日記の著者）天慶九年没や紀長谷雄　延喜十二年（九一二）没等が見られ、其の九世の孫に至り実重が武蔵権守と見える。此の実重が春日部に居住し其の郷名を附して氏としたる如く比定される。春日部氏系孫は古利根川流域から下流、東京湾にかけての地名に、大井、品川、堤、潮田を名乗っている一族である。

②春日部氏が歴史の中に名が出るのは寿永二年（一一八三）孔王部堅七代の孫、出戸遠康の末流出戸左ヱ門親実、之曽孫出戸左ヱ門尉を大壇那発願するとして阿弥陀寺に一用上人を招請　年三十七世の苗座に迎える。此の時帰依したる壇那に春日部右ヱ尉実高始め下河辺庄司行平、同四郎政義、大川戸太郎広行野与党の多名、白岡、鬼窪、逆江等の名代也。

③寿永三・三・廿二日　大井兵ヱ次郎実春名見える（春日部実高の弟）

④元暦元・五・十五日　大井兵ヱ次郎実春

⑤元暦二・二・一日　品川三郎（清実）（春日部氏の弟）見える。

元暦二・三・廿四日　源範頼の陣にて壇之浦の合戦の際、春日部兵ヱ尉　夜須行宗（七郎尉）と同戦にて奮戦す

⑥文治元（一一八五）、先陣兵十四人の内に大井兵三郎実春見える。（春日部兵ヱ尉の弟）

⑦文治元年十一月十二日、河越重頼（川越所領）義経の縁者の為に召上げられ、その内、伊賀国、香取五ヶ郷を大井次郎実春に賜わる。

⑧文治三年（一一八七）十月　春日部兵ヱ尉壇之浦合戦に参加した事証人として見える。

⑨文治五年（一一八九）三月十五日　大井兵三次郎実春見える

⑩文治五年七月十九日　頼朝、奥州征討に進発す　中道を進む（現陸羽道）下河辺庄司行平、大井二郎実春、大河戸太郎広行参加す、大井二郎実春見える。

⑪建久元年　頼朝上洛す、その時の供奉人に、大井四郎太郎　大井四郎、大井次郎実春、品川三郎清実、大河戸次郎、大河戸四郎行平、下河辺庄司、大河戸三郎、品川太郎実高、大井五郎実清等　品川太郎実高は後春日部実高となる人物

⑰ 建久元年（一一九〇）十一月一日 頼朝六条若宮並石清水八幡を詣でる供奉人に大井次郎実春が見える。

⑱ 建久二年（一一九一）二月四日、頼朝二所詣進発す、その供奉人に 下河辺庄司行平 大河之四郎（葛浜氏祖） 品川太郎実高 大井三郎実春

⑲ 建久二年十二月七日 大井兵工二郎実忠初見（実春の息か）

⑳ 建久六年（一一九五）三月十日 頼朝 東大寺供養 供奉人に 大井次郎実久 品川太郎実高（春日部） 大川戸太郎広行 大川戸次郎秀行（清久氏を継ぐ） 大川戸三郎行光（高柳氏祖） 下河辺四郎政義（行平の弟） 下河辺藤三郎 下河辺庄司行平・大井兵三郎実春等見える。

建久六・五・廿日 天王寺に頼朝詣でる、その供奉人に、下河辺庄司行平 大井兵三次郎実春見える。

㉑ 正治元年（一一九九）十月二十八日 梶原平三景時の専横な振舞に諸氏連署し誅殺せんと集る。千葉介常胤 三浦介義澄……葛西兵工尉清重 大井次郎実久 此の年頼朝の霊を葬うため 杉戸町清地に建願寺建つ

㉒ 正治二年二・二十六日 頼家 鶴岡社詣の供奉人に次御甲着 大井次郎実春見える。

㉓ 元久元年（一二〇四）十月 阿弥陀寺 大壇那 出戸右工門尉為隆の息為業を発願人として南蛮寺小四郎行親、下河辺庄司行平、春日部右兵工尉実光 他 野手、私市、熊谷の党 数多の資財を布施し、堂坊を再興す。

㉔ 元久二年（一二〇五）正月一日 春日部二郎 馬一匹献上す。

㉕ 元久二年六月廿五日 畠山次郎重忠 新所にあって不慮の討死す。此の攻手の中に、大井 品川、春日部、潮田、各氏見える。

㉖ 建暦元年（一二一一） 市内備後須賀稲荷社同所勝示寺縁起記に春日部少輔が此の年観請と記されている。

㉗ 建暦三年（一二一三）五月二日 和田義盛一族 突然幕府を襲う。幕府側防戦しつつ、次第に勢力を増加し 和田一族を追捕する、時、潮田三郎実秀の奮戦が見られる。春日部氏一族

㉘ 建暦三年八月廿六日 実朝将軍家新御所にて御行始め、供奉人に大井右工門尉実平（後の春日部氏）が見える。

㉙ 建保二年七月廿七日 大倉大慈寺供養也、

御出供奉人行列の中に　大井親右エ門実平見える

㉕建保六年正月廿七日将軍実朝右大臣に任ぜられ報恩の為、鶴岡八幡宮太拜の供奉人に、大井紀右エ門尉実平見える。

（此の帰路　実朝は公暁の為に刺殺された。）

㉖承久三年六月二十三日　承久の変、宇治橋等の合戦あり

吾妻鏡、廿七、承久三年六月頃

大井太郎　一人　潮田四郎太郎　一人

大井左エ門三郎　一人　品川小太郎　二人

品川四郎太郎　一人　清久左エ門尉　二人

平員の人々に、品川四郎

討死の人々に　品川二郎、同四郎三郎、同六郎太郎、大川戸小四郎、潮田六郎、江戸四郎三郎

㉗八月二日　於橋上被討　大河戸六郎、太田六郎道地三郎太郎、清久五郎行盛見える

㉘安貞二年七月廿三日　将軍家田村山庄（三浦）に出御　その供奉人に大河戸太郎兵衛尉、春日部太郎実景等見える。

㉙安貞二年八月十五日　鶴ヶ岡八幡宮にて「放生会」その供奉人に春日部太郎

㉚嘉禎二年五月　阿弥陀寺四十一世瑜伽道場建立発願し出戸氏、春日部氏、谷古宇氏に布施ありて建立す

（嘉禎三年の板碑が埼玉県内板碑の最古である）

㉛嘉禎二年八月四日　将軍家　若宮大路の新御所に移る。その供奉人に春日部左エ門尉（実光か）大河戸太郎兵衛尉　下河辺左衛門尉見える。

㉜嘉禎四年二月十七日　頼経六波羅に着、その供奉人に大河戸民部太部　大井三郎、品川小三郎実貞、春日部三郎兵衛尉、下河辺左衛門尉大河戸太郎兵衛尉、栢間左近将監、多賀谷太郎兵衛尉　春日部左衛門尉（実光）

㉝嘉禎四年二月廿八日　頼経　中納言拜賀の供奉人に、大井左衛門尉実景

㉞嘉禎四年六月五日　頼経　春日社参詣の供奉人に　下河辺右衛門尉行光　大井太郎光長、品川小三郎実貞等見える。

㉟嘉禎四年六月廿七日　御家人任官す、大井左エ衛門尉実景は　春日部甲斐守となる。

㊱嘉禎四年十月十三日　頼朝　関東に下向　供奉人に春日部、下河辺、大井、品川、大河戸、多賀谷、栢間等見える。

㊲仁治元年(一二四〇)八月二日　頼経将軍家、二所詣　その供奉人に、下河辺左エ門尉、大井大郎光長、春日部三郎兵衛尉　品川小三郎実員

㊳寛元元年(一二四三)七月十六日　春日部前大和守　由比浜にての几帳祭の祭料を献上するよう沙汰有り（春日部御産饌米か）

㊴寛元元年七月十七日将軍臨時出御の供奉人の結番定められ、上旬の供奉人に春日部甲斐守実景（大井実景が春日部甲斐守としての初見参）（野与党一族　須久毛太郎経高建碑か、板碑岩槻市笹久保字須久毛　善念寺に有り）

㊵此の年春日部本町庭山の稲荷社は春日部氏の勧請と伝う。

㊶寛元二年(一二四四)八月十五日　鶴ヶ岡八幡宮の放生命の供奉人に春日部甲斐守実景が見える。

㊷寛元二年八月十六日　鶴ヶ岡八幡宮にて的立競馬等が行われ、春日部甲斐守　流鏑馬に見え息子の次郎兵エ尉射手として見える。

㊸寛元四年(一二四七)正月六日　御弓始　大井太郎、春日部次郎が見える（大井、品川、春日部、潮田等は既して一諸に書かれる所多く、春日部氏の記述無き所は、他の三氏を追うと　その行動が判明する）

㊹寛元四年八月十五日、鶴岡八幡宮にて放生会、その供奉人に春日部甲斐守前司実景　春日部次郎兵エ尉が五位、六位の者として見える。（従五位又は六位に任官して居る事が判る）

㊺宝治元年(一二四七)五月十四日　頼嗣将軍夫人葬送の供奉人に春日部甲斐守前司見える。（此の時迄が春日部氏一族の頂点で一番得意の時期であった。）

㊻宝治元年六月二日　北条時政　諸国の家人を召集する。（三浦氏へ対抗する為か）

㊼宝治元年六月四日　三浦泰村の一族郎党等諸国より来集す。（春日部氏も参集か）

㊽宝治元年六月五日　安達城九郎泰盛　突然三浦館を急襲す。三浦方防戦空しく頼朝の墓所法華堂に退く　甲斐守前司実景……以下列侯千給候御影御前、或説往(ママ)貴、或及最後述

懐云云　專修念佛者也　勸請諸衆爲欣一仏浄土之因　行法喜讃向之、云々　亡親江軍兵攻入寺門競登、石橋三浦荘士等防戦　竭弓劍之芸武藏藏人太郎朝房責戦有大切、是爲父朝臣義絶身一有情之無相從僅寫　疲馬許也　不着甲冑之間輙欲討取之処、被扶千金持次郎左エ門尉　泰村方全員命　云々　西方挑戦者殆経三刻也、敵陣前窮力尽、面泰村以下爲宗之輩　二七六人、都合五百余人図二自殺。此中被聽幕府番帳之類二百六十人云云、次壱岐前司泰綱　近江四郎左エ門氏信等　兼仰、爲追討平内左衛門尉景茂　行向被長尾家、作職事之処家主父子者於法華堂自殺訖、敢無人千防戦、仍各空廻密、

此の乱で討死する春日部氏は、春日部甲斐守前司実景　同太郎左衛門尉広実　同次郎兵衛尉実秀　同三郎兵エ尉　何れも幕府番帳に記名ある武者であることが古文で判る。

㊾ 宝治元年六月十日　春日部甲斐守前司実景子息嬰兒一人、自武蔵国より到来云云　考察するに春日部氏の才五子に比定される、

㊿ 宝治元年六月二十三日、春日部甲斐前司実景幼息一人　自武蔵将参之、

考察するに、春日部氏の才四子であり後の左エ門三郎恭実に比定される

以上が春日部氏の前半の事跡である頼朝の旗挙と共に、武蔵下総武士と共に平家追討の使として源頼範旗下として　一の谷、壇浦と武功を立て鎌倉幕府の重鎮として名を成し所領官位共に一族栄えて居ったが　三浦氏と婚姻関係の爲　誠に無念残念の事と思う。以後一族の残留者は領地を失い、親兄弟は討死と悲惨な生涯を過す事になった。此の一族の怨念が後年、新田義貞の旗挙により、悲願達成、旧領回復のチャンスとばかり一族一縕全力を挙げて新田義貞に味方して死闘を繰け、鎌倉は打負かしたが後足利尊氏と新田義貞との主導権争に巻込まれ　又々不運の一族討死により春日部氏は遂に歴史上より消える事となるのであります

岩井茂氏著「春日部氏の研究より」文責　山崎善司

円空仏について

特異な像

関東の円空像は多様で、円空を語るには欠かせない地域となったわけだが、最後に、関東円空像を一わたり見わたしてみて、珍しい、特異な像の幾つかに注目してみたい。

春日部に近い越谷市大泊の安国寺にある観音像を、まずあげたい。高さ七〇・七センチのこの像は、像容はおとなしい表現にもかかわらず、関東の円空像のなかでは最も特異な、というより、円空全体像のなかでも最も特異な像といっていいかも知れない。というのは、体に浮彫されているモチーフにその特色がある。左の袖には竜と雲、右の手には稲穂を持ち、その下に鳥と魚を配するという、まったく特異なものであり、さらに右の裾には狐が浮彫りされている。これはぼくの推測だが、近くの稲荷社にあったものが、いつのころか安国寺に移ったのではないかと思う。右裾に彫られている狐がそのことを語っている。前面に装飾的に浮彫りされている稲、魚、鳥は収穫を祈ってのものと思う。

鳥の表現は青面金剛神などにも見られるが、魚を彫り出した例は他に一体もないのではないか、ぼくは見たことがない。顔の表情からしても、まぎれもない円熟期の円空作である。

この寺には、他に、一木のキリ材を真ん中から割って二体を彫り出した菩薩像（五一センチ）と地蔵像（五十二センチ）があるが、この二像と先の観音像とはまったく別のタイプの像である。住職から、安国寺が岩槻市渋江の浮安寺の末寺という話を聞いたので、改めて浮安寺にのこる二体の円空像――地蔵菩薩（一〇七・三センチ）と護法神（八八センチ）――を見直してみた。一木の丸太から無雑作に彫り出した地蔵は磨滅していて見栄えはしないが、素朴な、愛着のある像である。朽ちかけている安国寺の二体も、そうした像である。遊田町の矢島さんの家にも、一木のキリ材を真ん中から割って彫った、菩薩、地蔵の二体（五七センチ）があるが、これもかなり朽ちている。

小淵観音院

春日部の小淵に、日光街道に面して、修験派小淵観音院の立札がたっている。そこを入ると、すぐ山門があって、山門の額には「小淵山」とある。山門から真直ぐ石畳の向うに本堂があるという、ごく小ぢんまりしたお寺である。寺というより、やはり修験派の観音院といった方がふさわしい。本堂の裏手は畑がのびていて、藁屋根の農家が点々と見える。武蔵野のおもかげを感じさせる寺である。本堂は文政八年の建立という。ここに、円空像が七体、二メートルちかい観音像をはじめ、蔵王権現（ざおうごんげん）などの珍しい像がのこっている。

小淵観音院は、天台の滋賀園城寺の末派といわれ、江戸期には、関東では園城寺派の有力な寺院であった不動院の一院であったという。不動院は、幕末に、水戸藩士をかくまったため廃寺にされたとの言い伝えがある。

ぼくが初めて観音院を訪ねたのは、昭和三八年だが、その時は、聖観音、不動明王、雨宝童（うほうどう）子、蔵王権見、役行者の五体だったが、その後、久しぶりに訪ねてみると面白い護法神が二体あった。その一体の背面に、「護法大善神　大乗坊」と墨書されている。大乗坊は、おそらく、さきの不動院の一坊なのだろう。大乗坊については、住職の尾花三省さんから特別の知識をうることはできなかったが、尾花さんの語る言葉のはしはしから、何々坊、何々坊といった修験寺坊に住みついた円空の生活があった、とぼくはひとりでに想像をめぐらしていたのである。

聖観音は高さ一九五・八センチもある大作で、一木彫りの円空像では関東では最も大きい。円空彫刻にわざわざ一木彫りなどとことわるのはおかしいと思われるかも知れないが、数年前に、南埼玉　八潮市の大経寺に、臼を割って継いだ大きな、高さ二四一センチもある十一面千手像のあることがわかったから、わざわざことわったわけである。（大経寺の像のことは後で述べよう）。

高い宝髪、何かを念じるような細い目、そ

れでいて横に張った大きな口からは舌を一寸のぞかせている、左手に蓮茎を持ち、裳の雲形文様が目につく、踏割り蓮華座の上にどっしりと立つこの像、円空の大作にしては、珍しく抑揚のない、真面目くさった像に見える。

両宝童子（一三四・二センチ）にも同じことがいえる。童顔を雲でつつんだ装飾的な大きな宝髪を頭上にのせ、両手で宝塔を捧持して微動だもしない立像。不動立像（一三二・八センチ）についても同じである。

ぼくには、聖観音にしろ、両宝童子にしろ、不動にしろ、観音院の像は、いかにも修験者の自覚の上にたって彫られた像に見える。修験者の生活体験のにじみ出た像に見えてくる。観音の表情にしても、両宝童子や不動の表情にしても。両宝童子の頭部の強い装飾的な要素についても、このことはいえるかも知れない。

そして、修験者としての最大の表出を、この観音院の蔵王権現像（四〇・三センチ）に見ることができるだろう。観音院の像の中では、珍しく動きを捉えた像である。左足を岩座の上に力いっぱい踏んばり、その力を助長するように、はねた右足は衣のなかに消え、これと呼応して上げた右手は、ふりみだした豊かな頭髪の中に消えている。

くの字に踏んばった蔵王は、ぼくには、茶目気たっぷりなあばれん坊に見える。顔の表情もそうだ。生真面目な大作をここにのこした円空は、どこかで真面目さを破らずにはいられない。聖観音の一寸出した舌もそうだが、この蔵王権現像にいたって爆発したかに見える。あれだけ多くの彫刻をのこした円空にしては、不思議なことに蔵王権現は、これがただ一体である。（背面に「蔵王大権現」と円空自ら墨書した像を、岐阜県益田郡小坂町落合の富士神社にのこしているが、これは烏帽子姿の神像で、いわゆる蔵王権現の姿はしていないので、造形の面から観音院だけとみたのである）修験僧なら多く彫りそうな蔵王権現を、円空はただ一体しか彫っていない。その一体に全力をしぼったかのように、この蔵王権現像は力作である。

茶目気たっぷりな蔵王権現像にくらべると、役行者像（三〇・三センチ）は、俯きかげんの、おとなしい像である。兜巾をかぶり、独鈷と錫杖を持ち、高下駄をはいて坐る。大宮市の深作の宝積寺と蓮田町江ヶ崎の矢島忠男さんの家には、錫杖を持って立つ深い彫りの役行者像（六二・四センチ　四十七・八センチ）があり、寄居町の長昌寺と蓮田町黒浜の勝朔次さんの家にも錫杖を持ち高下駄をはいて立つ役行者像（六〇・センチ、五四・四センチ）がある。円空の作った役行者像は、この五体と、奈良県大和郡山市の松尾寺にある延宝三年銘の坐像（四四・七センチ）があるだけで、六体のうち、五体が埼玉県下にあることは、この土地での修験信仰にいかに熱心であったかの問題につながっているように思える。

ここで、前に一寸ふれた二体の護法神像について述べておきたい。二体とも、三角材に大胆に彫りつけた簡勁なもので、本来の五体の観音院像とはかなり性格の違った像である。

背面に「護法大善神　大乗坊」と墨書されている像（二九・三センチ）は、吊り上った大きなきつい目をむき出し、長い口の間から舌をのぞかせている。カラス天狗の像というのは恐らくこんな表情の像をいうのかと思わせる像である。

もう一体は、大きなしゃもじのような舌をべろりと出した奇妙な動物像（二八・七センチ）で、背面の、これまた達筆な墨書は、辛うじて「徳夜叉（神）」と読める。

円空のユーモラスにわずかに舌をのぞかせる像はよく見かけるが、これほど大胆に舌を強調した像はない。さきの大宮の薬王寺にある竜頭観音（六〇・七センチ）の竜も、大きな舌をむき出しにしている。しかし、この像はそれほど大きな舌も気にならないほどの、強烈な個性の溢れでた、優れた作品となっている。観音のやさしい可愛らしい顔と、その上におおいかぶさるように顔の向きと逆向きに彫られた大きな竜頭との極端な対比、その対比を調和するかのように、大胆な雲形文様の

処理で衣文をおおっている。

観音院の二体の奇怪な像から、われわれは何を感ずるだろうか。護法神と名のつく像は、円空は他にいくらも彫った。しかし、これほどあくどい像は、他にないだろう。観音院の像から、修験者円空の二つの面をみる思いがする。一つは、聖観音像に見る真面目さであり、一つは奇怪な像から感じられる、人を小馬鹿にしたような点である。円空は、何を考え、何を言おうとして、この像を彫ったのか。

最後に興味をひくのは、観音院の像が、いつ彫られたかということである。埼玉の円空像が彫られたのは、漢然と、日光巡拝の元禄二年前後とされている。この謎を解くかのように、「聖観音」と刻まれた額が山門の屋根裏に長い間ねむっていた。

ぼくが、初めて観音院を訪ね、一日がかりでいろいろ見せていただいて帰ろうとすると、住職の尾花さんが、山門の屋根裏からこんなものが出てきましたよ、といって見せてくれたのが、この額である。縦四三・二センチ、横七五・七センチのケヤキの板に、右から「聖観音」と大きく横に彫られ、左下隅に、「願主　淨円」と彫られている。裏には、「元禄二己巳歳四月十七日」と同じ字体で刻まれている。淨円は、正年行事となった人で、観音院中興の祖と伝えられる人である。この額と一緒に、「両峯修行、正年行事、葛城嶺御祈禱之札」と墨書された板も見せていただいた。この二つは観音院での円空を考えるうえに、大事な点をもっていると思う。

ここで、元禄二年の円空の遍歴をみてみると、元禄二年三月に、滋賀県伊吹山の中腹にあった旧太平寺を訪れていることが、そこにのこっている十一面観音像の背面銘「元禄二己巳年三月初七日」からわかるし、六月には、栃木県日光田母沢の明覚院にいたことが、そこで彫られたことを証明する観音像背面の墨書からわかっている。まえに述べたように、観音院での彫像は、日光巡拝の前後とみて、漢然と元禄二年ごろと推測されてきているわ

けたが、先の額の元禄二年四月を、円空遍歴の元禄二年の中に組み入れてみると、伊吹山から日光への途中にあたる。この推定はかなりの真実をもっているように思える。

「聖観音」の額が、仁王門のためのものなのか、観音堂にあったものかはわからないが、ぼくの限られた想像では、浄円の時に円空が来て一ヶ月ほど滞在、それが契機となって仁王門が生れ、また、円空の彫った聖観音像を祀るための観音堂が建てられたのではないか、ということである。そう解することができるのではないか。「元禄二年四月」という、いかにももっともらしいこの額を目の前にして、ぼくだけではなく、おそらく円空に興味をもつ誰でもが、額と円空との結びつきを考えたくなるのは当然だろうし、やはり真実性があるように思えるのである。

丸山尚一著

円空風土記より

円空の略年譜

東海女子短期大学教授
鑑修 土屋常義
制作 埼玉会館 事業課

元和の頃（一六一五～一六二三年）　出生は明かでないが、美濃国（岐阜県）竹ヶ鼻、今の羽島市上中町の一農家に生れたと伝えられている。

寛永 年間（一六四三年頃）　若くして出家・愛知県高田寺にて密教を受け、園城寺（三井寺）の尊栄を師として大峯山修業、その間大日如来の像を作る。

明歴 年間（一六五六年頃）　名古屋市荒子観音寺で仏像をつくる。

寛文 四年（一六六四年）　岐阜県福野白山神社の神像をつくる。

寛文五～七年（一六六五～　津軽半島義経寺に本尊をつくる。後北海道に渡り寛文六年

六七年）

寛文七、八年（一六六七―八年）

寛文九年（一六六九年）

寛文十一年 延宝二年（一六七四年）

延宝三年（一六七五年）

延宝四年（一六七六年）

延宝七年（一六七九年）

延宝八年（一六八〇年）

ケボロイ洞窟にて観音像数体をつくる。

青森県下北半島佐井村長福寺の観音作像 大湊常楽寺の秘迦像をつくる。後秋田地方に入り男鹿半島門前五社堂の十二面観音像、男鹿市増川八幡社の神像をつくる。

岐阜県厩曽礼の白山神社で神像をつくる。奈良の法隆寺で法相宗を学ぶ。

三重県志摩半島を遍歴（日空の仏画十枚あり）

法隆寺奥、院松尾寺の役の行者をつくる。天河神社の大黒天をつくる

愛知県守山市の竜泉寺で作像、後名古屋市観音寺で作像

岐阜県郡上郡内を遍歴、美並村に五体あり。

飛弾地域を遍歴、多数の像をつくる。

貞享二年（一六八五年）

元禄二年（一六八九年）

元禄三年（一六九〇年）

元禄四年（一六九一年）

元禄五年（一六九二年）

元禄八年（一六九五年）

長野県木曽に十三体、群馬県妙義神社、水沢観音の薬師如来もこの頃の作という

滋賀県伊吹山の中腹太平寺部落、山東町光明院にて作像、後日光市遍歴・中禅寺清滝寺で作像。

この頃大宮市を中心に埼玉県内各地に作品を残したらしい。

この年岐阜県厩市の彌勒寺を再興し、更に圓城寺（三井寺）に仏像七体をのこす。

岐阜県金木戸の観音像をつくる。

岐阜県下呂町の今井家で青面金剛の神像をつくる

岐阜県洞戸村高賀神社で最晩年の傑作多数をつくる。

七月十三日 円長から師資相承の血脈譜を授与された。

七月十五日 彌勒寺前の長良川畔で生定に入る。年令不明。ここに墓碑あり。